

現代青年の意識と行動 —アイデンティティの問題に関して—

相良 麻里

(平成 17 年 10 月 6 日受理)

The Attitudes and Behavior in Adolescence —Some Problems Concerning One's Identity—

SAGARA, Mari

(Received on October 6, 2005)

キーワード：アイデンティティ, 発達課題, 青年期

Key words : identity, developmental tasks, adolescence

はじめに

人は、社会・文化的環境との関わりの中で、適切な学習・教育の過程を経て、幼児期、児童期、青年期といった個々に独自の発達のな特徴を持ちつつ発達していく。現代社会は自然・社会・文化的様相の変化・進展はめざましい。それに伴い複雑・多様化した社会は多極化した価値観が次々と生じ、我々の生活や意識・行動・態度に大きく影響を与えている。高学歴化、晩婚化、管理社会化という社会変化に対応して、過度の緊張や葛藤、その反動での弛緩などが余儀なくされ、子どもや青年の多くが問題や課題を多く抱えることとなっている。

青年期を中心とした子ども達がひき起こす諸問題が急増し、学校内での事件も多発、また、集団自殺、ニートなど様々な、そして新たな問題が日々新聞の紙面に掲載されている。それは数々の統計調査などにも現れていく¹⁾。この調査や統計から読みとれる意識や価値観は従来の世界と明らかに異なり、年々深刻な状況になってきている。人間はすでにできあがってものとして生まれてくるものではない。人格的にも調和のとれた人間へと成長していくためには、自然的発達にそくしたそれぞれの発達段階を履行しなければならない。人間の発達は決して平坦なものではなく、連続、非連続の組み合わせされた複雑な過程をすすむ。

さて、本稿のテーマにある青年期の意識と行動は、素

行上の問題だけを意味するものではない。無気力、無関心、自己中心主義、自己愛的パーソナリティ、耐性欠如などといった、人格、パーソナリティ、性格なども含めている。

では、直面している諸問題を解決し改善していくためにはどうしたら良いのであろうか。本論では青年期の意識と行動について発達課題の視点から検討し、自己愛と攻撃性との関わり合いの調査結果をもとに考えてみたい。

発達課題履行の重要性

現代社会において、子ども・青年は、望ましい心身の発達をどのように促していったら良いのであろうか。

過保護や過干渉、受験にともなう過剰な競争は年々厳しさを増し、そのために挫折、孤独に陥り、自立的能力の形成や人格陶冶という適切な成長、発達が阻害されている環境におかれている。すなわち、問題の根源的要因の一つに社会構造が起因していると考えられる。そのため、優しさ、思いやり、責任、希望、愛などといった E. フロム (E. Fromm) のいうヒューマニズム・すなわち愛と理性に基づく自己を十全に実現するための人間的体験がなされない。自己を充足させたいという本来の人間の欲求が生起されにくく、それは、人間が自然や芸術とふれあうダイナミックな体験の中で出会う(直感といった創造性体験、感激、感動、といった美的体験)いわゆる A. H. マズロー (A. H. Maslow) のいうところの至高経験 (Peak experience) をすることもできない。

このように、望ましいパーソナリティ形成が阻害され

る要因が多い社会の中において、子ども・青年は単純で短絡的な行為や態度・衝動が一層強まる傾向にあり、身体的、生理的、心理的、社会的、発達の調和は崩れ、歪んだ自己愛が形成され、攻撃性が高まり、人間の全体的発達はバランスを欠いている。町沢静夫は、母子密着が強くなり、家庭の中で大切に育てられ、万能感が壊れることなく成長し、その結果、人と深く関わると傷つくことがわかると、人と関わることを避け、自分の殻にとじこもる自己愛的青年の増加を指摘している²⁾。青年期はその発達過程において最も自己愛的傾向に陥りやすい。むしろ、発達において、すべての諸能力が画一的に伸びていくものではないが、成長、発達を阻害される今日の社会・環境のもとでは、望ましいパーソナリティ形成に欠かせない、〈人間的体験〉や〈至高経験〉をすることは困難であり、その状態から回復する過程をたどることができない。その結果が、現代の子ども・青年の特徴としてあらわれてきているのではないだろうか。

現代の子ども・青年は、「指示待ち人間」「マニュアル人間」といわれ、自立・自律能力の形成の遅れや、いわゆる依存傾向が強く、意欲的、積極的に物事に取り組む姿勢、すなわち自発性に乏しい。そして生きる力の欠如は前向きな成長への志向が低下していることを指し示す。無気力、無関心、ニートなど新しいモラトリアム心理が現れ、これらの現象が、現代の子ども・青年に広がり、深く浸透している。小此木啓吾は現代の日本社会の状況を自己愛社会と呼ぶことができると述べている³⁾。そして社会そのものにいわゆる「シラケ」が広がり、社会そのもののモラトリアム人間化を指摘する。

偏差値や学力の優劣に人間の存在価値を求める価値観が一般的になり、その価値観が優先され、人間本来の人間の発達という視点は置き去りにされてきた。

人間は適切な人間的体験、経験、行為などを通して、段階的に発達し、人間的な諸能力を形成していく。発達課題はある発達の特徴を有する段階で達成することが期待されている課題であり、その課題の達成は、個人の社会的承認をもたらす、その後の課題遂行のための望ましい基盤をつくる。しかし、課題達成が阻害されると、その後の発達に支障をきたす。すなわち、社会からの否認をもたらすことになりかねない。

この発達課題については多くの研究者が様々な角度から研究し、論じられてきた。フロイト (S. Freud) をはじめ、ピアジェ (J. Piaget)、エリクソン (E. H.

Erikson)、ハヴガースト (R. J. Havighurst) などである。望ましいパーソナリティ形成には、発達課題を十分にこなしながら獲得していくことが必要なのである。

子ども・青年の問題行動に関しては、背景に複雑な要因(資質や特性、家庭環境等)が絡み合っていることが要因であるが、それまでの発達過程において、すでにこなしておかなければならなかった発達課題を適切に通過してこないことから生起しているといえよう。

ハヴィーガーストの発達課題について

発達課題について、教育的な視点から体系的理論にしたのがハヴィーガーストであった。彼によれば、発達課題は個人的要求と社会的要請の両方の性質を併せ持った理論であるという⁴⁾。「発達課題は個人の人生のそれぞれの時期に生じる課題であり、これらの課題をうまくこなすことで幸せな生活と幸せな将来がもたらされるのである。しかし、これらの課題をうまくこなせないと個人は幸せではない状態、社会への不適応が生じ、将来の生活がうまくいかない」と述べている。彼は児童期と青年期の発達課題を次のように設定している⁵⁾。それらの内容が基本的スキルとして習得されるべき課題である。

児童期の発達課題

- ①一般的な遊びに必要な身体的技能の学習
- ②自己の身体に対する健全な態度の形成
- ③仲間とうまくやっていくことの学習
- ④適切な性的役割の学習
- ⑤読み・書き・計算の基礎的技能的発達
- ⑥日常生活に必要な諸概念の発達
- ⑦良心・道徳性・価値判断の基準の発達
- ⑧個人的自立の達成
- ⑨社会的諸集団や制度に題する態度の発達

青年期の発達課題

- ①同年齢の仲間との新たな関係の発達
 - ②男性・女性としての適切な社会的役割
 - ③自己の身体的特徴の理解とその有効な使用
 - ④親や他のおとなから情緒的独立の達成
 - ⑤結婚・家庭生活への準備
 - ⑥経済的な独立や職業選択への準備
 - ⑦社会人として必要な知識・責任・態度の形成
 - ⑧行動の指針としての価値および倫理的な体系の獲得
- もちろん、ハヴィーガーストは乳幼児期、成人期、中年期、老年期についても発達課題を設定している。それ

らはエリクソンの発達課題の区分を根拠にして発達段階を幼児期・(0～5歳) 児童期(6～12歳) 青年期(13～17歳) 成人期(18～30歳) 中年期(31～54歳) 老年期(55歳以上)の各段階に区分し、発達課題を明らかにした。すなわち、発達課題は生涯にわたり続くものであり、教育の目標とするものなのである。

エリクソンの発達課題について

E・H・エリクソンはそれぞれの発達段階とその発達課題の基本を次のように設定している⁹⁾。

- ①乳児期 基本的信頼対不信
- ②早期児童期 自立性対恥と疑惑
- ③遊戯期 自発対罪悪感
- ④学齢期 勤勉性対劣等感
- ⑤青年期 同一性対役割混乱
- ⑥成人前期 親密性対孤独
- ⑦成人期 生殖性対停滞性
- ⑧成熟期 自我の統合性対絶望

エリクソンはライフサイクルにおける青年期に達成しなければならない発達課題を同一性対同一性拡散、すなわち、アイデンティティの確立・自我同一性の達成に焦点を合わせている。彼は「自我同一性とは、青年が成就しなければならない中心的仕事であると考えられる。すなわち彼がかつてそうであり、また現在そうなりつつあるものと、それから彼が考えている自分と、社会が認めかつ期待する彼と、これらすべてを総合して一貫して自分自身をつくりあげることである」と述べている¹⁾。しかし、自我同一性を達成することは容易なことではない。そのためには時間的余裕が必要になってくる。エリクソンは青年期の、価値葛藤の頂点を、モラトリアムと名付けた。このモラトリアムとはどのような状態を指し示すのであろうか。もともとモラトリアムは、支払い猶予、執行猶予を意味している言葉である。この期に様々な遊びや実験など試行錯誤的な役割実験を行う。それらの行為の範囲はあくまで実験の範囲であり、子どものごっこ遊びに通じるものである。そのため、その行為の責任や義務は猶予される。それは、同一性意識達成のために必要なことであり、それまでにおこなった数多くの同一化を、社会との関連の中で捉え直すことにより形成されていく統合された自己を獲得する過程でもある。本来、自我は一貫性、統合性をもつものであるが、青年期にこの自我同一性を達成しなければならない課題にあえてすえ

るのは、この時期、自我が大きく変化し、ゆらぐからである。E. シュプラングァー (E. Spranger) は次のように述べている⁹⁾。「固有の存在としての自我の発現は、それまで自我体験が全くなかったと解すべきではない。子どももエゴをもっている。しかし、それは、子どもにとって当たり前のことであって、存在しなかったり通用しなかったりすることもありうるものとして意識されることはまったくない。子どもに爽やかな、反無反省なエゴイズムがあることは知られている。人は青年時代にすでに自分自身を発見するものだというように、われわれの「自我の発見」という合い言葉で解すべきではない。むしろ独特の新しいものとして考えられるのは、目を内界に向けること(内省)である。主観をこの世の他のすべてのもの、事物および人間から常に孤島のように離れた一つの独自の世界として発見することであり、大きな孤独の体験を伴うものである。

われわれは、もっと厳密に次のように言わなければならない。目が向けられているこの自己はまだまったく存在しないのであると。それは少なくとも見えないのである。その代わり、初め一種の内的動揺が起こって、自分自身を問題にするところから、すべての青年に認められるある典型的な現象が生まれる」と。

このようなモラトリアムの段階を経て、青年は自己同一性を作り上げていくのであるが、現代社会はアイデンティティの確立が遅れ、モラトリアムが延びる傾向にある。ニート・学生時代の長期化がそれである。そのため、長期間にわたり、自己統一性を達成できず、自己定義との間で葛藤・混乱をする。

エリクソンは青年期における危機・葛藤の課題(アイデンティティ拡散)を構成する特徴を次のようにあげている⁹⁾。

- ①「時間的展望対時間拡散」
- ②「自己確信対同一性悪感」
- ③「役割実験対否定同一性」
- ④「達成の期待対活動性のマヒ」
- ⑤「性的同一性対両性の拡散」
- ⑥「指導性の分極化対権威の拡散」
- ⑦「イデオロギーの分極化対理想の拡散」

上述のようなアイデンティティ拡散の過程を経て、青年は自律的自我を形成し、自立的活動を生み出していかなければならない。このように、エリクソンのいうアイデンティティ概念は青年期の発達課題のなかで最も重要

なものと考えることができるのである。

青年は複雑な現代社会の中で様々な葛藤の渦に巻き込まれながらも、自己をとらえなおし、自己定義をはかり、自我同一性を達成しなければならない。健康なパーソナリティの形成・獲得は、人間形成における重要な課題であるといえよう。すなわち、アイデンティティの確立は個人の生活体験を超えて社会的歴史的変化の中に位置づけられるのである。そして、自己の人格の統合性、統一性を確立する必要が現代社会ではますます必要になっているのである。

アイデンティティ形成の重要性

人間は幼児期から様々な内的・外的の葛藤・危機に直面する。発達課題を履行した健康なパーソナリティはそれらの葛藤・危機を克服するたびに、自己の内的統一性がはかられ、自我は一つの段階での課題を達成する。このような発達についての分析的枠組みに大綱について下記に列挙してみたい¹⁰⁾。

- ①発達過程にあるリビドー的欲求の増大、およびそれと並んで、欲求充足、欲求不満、「昇華」などの新たな可能性。
 - ②社会的経験範囲の拡大、つまり、子どもが有意義な応答をすることができる人々の領域・質的な増加。
 - ③その応答の基盤をなすところの、子どものより高度に分化した諸能力。
 - ④新たに遭遇した経験を、ある時間内に処理しなければならない必要性から生じた発達の危機。
 - ⑤新たな依存関係や無遠慮な言行の自覚化（たとえば、幼児期初期にみられる、見捨てられたという感覚）とともに生まれる新しい疎外感。
 - ⑥将来におけるすべての力強い行為や精神の基礎となる、とくに新しい心理的社会的な力。
- などである。

こうした、枠組みはアイデンティティに関連した大まかな発達の枠組みであるが、人間は乳幼児期から、様々な遊戯性、実験性を繰り返し、各段階ごとに得られる自己意識を統合しながら社会的自己同一化をはかっていく。そして、最大の試練に直面するのが、上述のようにモラトリアム期である青年期である。現代社会において、この青年期の発達課題の履行上、意識過程に多くの問題を含み、様々な調査の中で、問題点が指摘されている。例えば慢性的な欲求不満、情緒不安定、自主性の不足（無

気力）、自己解決力の不足、利己主義、思いやりの不足（無関心・無責任）、あらゆる面での情操の不足（無感動）、他律的道德心、などである。そして、青年が自己愛的になってきているという指摘も多方面にわたっていくつかなされてきている。

福島章は青年期における人間関係の希薄さから、内的な想いが幻想となり、自己愛的な青年が増加しているのではないかと指摘する¹¹⁾。

すなわち、他者との接点が少なくなったことにより現実を認知することができず、衝動的傾向が強く、知的、論理的、心理的耐性の欠如から、誇大的な概念に陥りやすい。このことが、歪んだ自己愛的パーソナリティをもった青年の増加につながっているのではないかという。こうした状態は、成長・発達過程において健康で、望ましいアイデンティティの確立が充分でないことを意味している。

アイデンティティの問題 自己愛と攻撃性

これまで発達課題の重要性を論じてきたが、現代の青年の集団の意識の特徴としてあげられる自己愛的パーソナリティについて考えてみたい。

フロムは自己愛(narcissism)について自分自身を愛し、大切に思うことであり、誰にでも認められる心性であり、人が生きていく上で必要なものであると述べている¹²⁾。しかしながら、現代の子ども・青年は適切な発達課題をこなすことが困難なため、自己愛形成に歪みが生じる傾向にあるのではないだろうか。そのため、幼児期の万能感を持ち続けたまま成長し、自分自身を守るため、すなわち自己愛を守るためなら、いかなる行動も良しとする傾向が強まっていると考えることができるのではないだろうか。

以下、現代の青年の意識傾向を探るため、質問紙調査を行い分析・検討を試みた。

方法

質問紙の構成

自己愛傾向 小塩(2004)の自己愛人格目録短縮版(NPI-S)の30項目(優越感・有能感、注目・賞賛欲求、自己主張性の下位3尺度×各10項目)をそのまま使用した。各項目の表現がどの程度調査対象者自身に当てはま

るかという点に関し、1(全く当てはまらない)から5(とてもよく当てはまる)までの5段階評定を求めると、下位尺度ごとの評定値合計が得られ、それを各下位尺度得点とした。また30項目全ての合計点をNPI-S総得点とし、自己愛傾向を表すものとした¹³⁾。

攻撃性 安藤ら(1999)の日本版Buss-Perry攻撃性質問紙(BAQ)の下位4尺度(短気、敵意、言語的攻撃、身体的攻撃)から、それぞれ因子負荷量の高いものを3項目ずつ(4×3=12項目)選択して使用した。自己愛傾向と同様に、各項目に5段階評定を求め、各下位尺度得点およびBAQ総得点を求めた¹⁴⁾。

調査対象者と手続き

関東近県に住む4年制大学の男女169名(平均年齢20.44±1.40歳)を対象に、無記名で質問紙への回答を求めた。

結果

各尺度得点間の相関係数をTable 1に示した。

Table 1 : NPI-SとBAQの相関関係 (N=169)

NPI-S	BAQ				
	総得点	短期	敵意	言語	身体
総得点	.273**	.199**	-.137	.402**	.199**
優越感	.063**	.043	-.297**	.251**	.111
注目	.162*	.161*	.068	.088	.093
主張性	.396**	.241**	-.092	.589**	.250**

** $P < .01$, * $P < .05$

考察

まず自己愛傾向(NPI-S総得点)としては、攻撃性(BAQ総得点)と正の相関がみられた。この点については従来の先行研究(湯川, 2003など)において見出されている結果と一致している。ただし、自己愛傾向の下位尺度においていくつか注目すべき特徴がみられたため、以下に列挙してみたい。

一つは、自己主張性が短気、言語的攻撃、身体的攻撃と正の相関を示したことである。これは自己主張性が強いパーソナリティと攻撃性になんらかの関連性があることを示している。次に注目・賞賛欲求であるが、短気との間に正の相関をみることができた。そして優越

感・有能感であるが、これは言語的攻撃と正の相関がみられた。このことにより、優越感や有能感が強いパーソナリティは他者への言語的な攻撃行動をとる傾向にあるということが読みとれる。

以上の結果から、現代の青年の意識傾向として、自己愛傾向と攻撃性に関係があることが認められる。

このように、現代社会において成長・発達過程において健康で望ましいパーソナリティを獲得するということが容易なことではないのである。

本稿の前半で取り上げた、発達課題の視点は、こうした青年の意識の諸傾向を理解し解決していこうとするときに重要な視点になってくると考える。そして、アイデンティティの確立の重要性は現代においても欠かせない視点であり、人間学的な観点からみても、新たに展望を開いていこうとするためには、今一度根元的理論に立ち返ることが重要であると考えられるのである。

発達課題の達成と自己実現

人間の発達には発達段階の履行が必要不可欠なことは先にも述べたが、我々を取りまく環境は危機的要因に満ち、現代社会の価値観の混乱に巻き込まれ発達課題を達成することが困難になってきている。

発達と教育の視点からみると、人間性の全体的発達と発達課題の履行は自己実現概念と密接に関わりをもって

いる。教育は、その目的を人間の自己実現にすえるが、その自己実現は、自己の人間の本質である素質や諸能力、その他、内なる自己をどう発現し、伸びゆこうとするかということにある。そして、自己実現は人間教育のひとつの大きな目標でもある。

マズローは自己実現とは¹⁵⁾「自己の素質や才能、能力、可能性の使用と開発であり、自己の資質を十分に発揮し、なし得る最大限のことをすることである。静止せず、到達しきっておらず、常により良い成熟に向かって動いている。その実現化のプロセスは、真の自己の発展あるいは発見、および実在している。あるいは潜在している能力の絶えざる発達を意味している。」とし自己実現化しつつある人間はすべて例外なく、自分の体外にある目標を立て、その何者かに従事、専心し、つまらない目標でなく、本質的に・究極的な価値の追求に専念していると述べている。

それは、人間形成の場としての学校教育においても、

自己実現は重要な達成課題として設定されている。文部省の生徒指導の手引き第20集によれば次のように定義されている¹⁶⁾。「生徒指導は、一人一人の生徒の個性の伸長を図りながら、同時に社会的な資質や能力・態度を形成し、さらに将来において社会的に自己実現ができるような資質・態度を形成していくための指導・援助であり、個々の生徒の自己指導能力の育成を目指すものである。」

このことから、学校教育においても発達課題の重要性を以前から重視し、それをふまえた上で、自己実現を教育の目標に掲げていることがわかる。

現代の子ども・青年が発達課題を適切に履行し、このような自己実現への道（自己の可能性の最大限の発展・最善の自己の形成）へ一歩踏み出すためには、上述のように発達特性を理解し自己実現へのプロセスに配慮された教育的援助、指導がこれまでより一層必要になってくると考えられる。豊かな人間的成長・発達の問題として、生きていく上で必要な知識や技能の基礎を学び、自己実現に向けての準備として人間関係や道徳観、価値意識を習得することが大切なのである。そしてそれはその過程において他者から受容され共感する体験を持つことによつて果たされていくものといえる。

そのためにも、今こそ発達課題の達成、アイデンティティ論の確立を吟味し、適切で望ましい自己実現のための方策として、人間的発達の過程、その段階、発達課題の意味がよく理解されることがのぞまれるのである。

おわりに

これまで、現代青年の意識・行動について調査結果とともに発達課題の視点から考察してきた。現代社会は、望ましい心身の発達を阻害する要因に満ちている。それゆえに今日の社会の特質を客観的・冷静的に受け止め、現代社会においての子ども・青年の自然的発達への正当な要求を、どのように理解し、受け止め、適切に援助していくことができるか考えていかなければならぬ。そして、子ども・青年の多くが抱える問題や課題の解決にはやはり上述のように自己実現を達成するための方策として、健全なパーソナリティ形成、人間的発達の過程、その段階、発達課題の意味の理解が必要不可欠になってくるのである。

今日的状況を視野にいれた子ども・青年の人間的・人格的に調和のとれた発達のために、またアイデンティティの確立のために、こうしたことに留意し適切に教育がな

されてゆくことが、早急にのぞまれることであろう。

註

- 1) 例えば「青少年白書」(2004) 内閣府など
- 2) 町沢静夫 (1998) 「現代人の心にひそむ自己中心性の病理」双葉社
- 3) 小此木啓吾 (1981) 「自己愛人間—現代ナルシシズム論—」朝日出版社
- 4) R. J. Havighurst (1972) 「Developmental Tasks and Education」(3ed ed) Longmans
- 5) R. J. Havighurst (1953) 「Human development and education」Longmans, green & Co, INC, New York (莊司雅子監訳) (1955) 「人間の発達課題と教育」玉川大学出版部 pp47-52
- 6) E. H. Erikson (1969) 「Identity-Youth and Crisis」Norton
- 7) E. H. Erikson (1959) 「Psychological Issues Identity and The Life Cycle」(村瀬孝雄・近藤邦夫訳) (1989) 「ライフサイクル その完結」みすず書房 p34
- 8) E. Spranger (原田茂訳) (1972) 「青年の心理」協同出版 p32
- 9) E. H. Erikson (1969) 「Identity-Youth and Crisis」Norton
- 10) E. H. Erikson (1969) 「Identity-Youth and Crisis」Norton
- 11) 福島章 (1992) 「青年期の心—精神医学からみた若者」講談社
- 12) E. Fromm (1956) 「The art of loving, New York : Harper & Brothers」(懸田克躬訳) (1959) 「愛するということ」紀伊国屋書店
- 13) 小塩真司 (2004) 「自己愛の青年心理学」ナカニシヤ出版
- 14) 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子「日本版Buss-Perry攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討」心理学研究, 70, pp161-162
- 15) A. H. Maslow. (上田吉一訳) (1976) 「自己実現の心理」誠信書房 p22
- 16) 「中学校生徒指導資料」(1965) 文部省

参考文献

湯川進太郎 (2003) 「青年期における自己愛と攻撃性－
現実への不応と虚構への投入をふまえて－」 犯罪心理
学研究
松原治郎 (1974) 「日本青年の意識構造」 弘文堂

堀尾輝久 (1991) 「人間形成と教育」 岩波書店
川瀬八洲夫 (1983) 「問題行動の源泉にあるもの」 音楽
教育研究
倉戸ツギオ (1994) 「発達と学習の心理学」 ナカニシヤ
出版

Abstract

Living in the contemporary world, which is getting more and more chaotic, we often find that our traditional values have changed into multipolarized new values, and it seems difficult to perform the tasks which are necessary for desired human development. The aim of the present paper is to solve the certain contemporary problems by reviewing theories of identity and developmental tasks, as well as discussing a scheme for self-actualization.